

スペイン語圏を知る本(その27)

『スペインのユダヤ人』

(関哲行著 山川出版社、2003)

評者 坂東 省次

山川出版社の世界史リブレット第二期(全36巻)の刊行が開始した。第一期が通史論なら、第二期はテーマ論だが、その一冊に『スペインのユダヤ人』が刊行された。ユダヤ人については第一期の『世界史の中のマイノリティ』などの中で部分的に扱われていたが、今回はユダヤ人の中でも歴史的に極めて重要な役割を果たしたとされるスペイン系ユダヤ人がメインテーマなのである。

「ヨーロッパ・キリスト教世界をとらえなおし、歴史学の新たなパラダイム(模型)を模索するうえで、主要な媒介変数の一つとなる可能性を内包している。」筆者はこう言って、マイノリティー、「内なる他者」としてのユダヤ人とコンベルソに焦点を合わせ、中近世スペインを中心に現代にいたる対立と共存の歴史を探っている。

世界のユダヤ人はアシュケナジーとセファルディーに大別される。前者は東欧系のユダヤ人を、後者はスペイン系ユダヤ人を指す。日本でユダヤ人といえば、一般にアシュケナジーを指し、日本におけるユダヤ関係の出版物も大半を占める。ユダヤ人がスペインを追放されて500年目の1992年、もともとドイツ文学が専攻であった小岸昭氏が『スペインを追われたユダヤ人』(人文書院)を出版したのを契機に、日本でも少しずつその存在が知られるようになり、それから3年後の1995年には『スペインのユダヤ人』(平凡社)が翻訳出版された。

本書の著者関哲行氏は『スペインのユダヤ人』(平凡社)の共訳者の一人でもあるが、その他にも専門のスペイン近中世史に関する優れた業績はいうに及ばず、スペインのユダヤ人に関する論文も数多くあり、著者のユダヤ人研究はすでに広く知られるところである。100頁足らずの本書は一見やさしい「スペインのユダヤ人史」の案内書の

ように見えるが、氏の長年にわたるスペインのユダヤ人研究がここに凝縮しており、予備知識なしでは読解は難しいのではないだろうか。しかし同時に、スペイン系ユダヤ人のおよそ2000年に及ぶ歴史を見事にまとめた待望の書であり、名著と言っても過言ではないだろう。

スペインのユダヤ人の歴史は紀元前に始まり、紀元後1-2世紀にはそれを裏付ける資料も発見されている。スペインのユダヤ人の歴史は波瀾万丈の一言に尽きよう。中世スペイン社会で黄金時代を築いたかと思えば、1492年にはスペインから追放されてヨーロッパ・キリスト教世界やイスラム世界に拡散したが、オスマン帝国で再び黄金時代を築いた。オスマン帝国の解体によってユダヤ人の離散は余儀なくされ、拡散はアメリカ大陸にまで及んだ。アメリカに最初に到着したのはセファルディーであったが、やがてアメリカのユダヤ人の中心はアシュケナジーに移行し、セファルディーはユダヤ人の中でもマイノリティー的存在になるのであった。

スペイン社会でマイノリティーとして存在したスペイン系ユダヤ人も、追放後はユダヤ人社会の内なるマジョリティーとして、イスラーム世界、カトリック世界、プロテスタント世界というあい対立する宗教圏をこえて、地中海と大西洋に跨がる国際的商業ネットワークを樹立した。近代世界システムの一翼を担ったのであった。

およそ2000年にわたりマイノリティーにしてマジョリティー、マジョリティーにしてマイノリティーという複雑な歴史をたどってきたスペイン系ユダヤ人は、「もう一つのスペイン史」を雄弁に語ってくれる興味深い歴史でもあるのだ。

最後に一つ。スペインを追放されて世界に拡散したユダヤ人は、固有の宗教、固有の歴史とともに固有の言語体系をもつマイノリティーとして定着した。言語体系には80もの名称があるといわれる。本書では「ラディーノ語」と「ユダヤ系スペイン語」の2つの名称が用いられている。「ユダヤスペイン語」でよかったのではないだろうか。

ばんどう しょうじ(教授・スペイン語学)